
バカと怠惰と召喚獣

理宇市

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと怠惰と召喚獣

【Nコード】

N0213X

【作者名】

理宇市

【あらすじ】

基本的にやる気なし、通称「怠惰の悪魔」の樽井泰陀が主人公の2次創作。ダラダラ系主人公が友人達に巻き込まれたり、乗ったり、サボったりしながら文月学園で過ごしていくような物語…だよね？

第1問 主人公はタルイ（前書き）

気分転換に新作でも…

第1問 主人公はタルイ

問 タルイ タイダ 樽井泰陀はどのような人物か答えなさい。

吉井明久の答え

「基本的にだらけてるかな？」

樽井泰陀のコメント

「省エネしてんだよ」

坂本雄二の答え

「通り名がヘルフェーゴール怠惰の悪魔だな」

樽井泰陀のコメント

「誰が付けたんだよ、その通称」

木下秀吉の答え

「あの腹話術や声帯模写には目を見張るものがあるのう」

樽井泰陀のコメント

「特技だからな」

土屋康太の答え

「……………侮れない」

樽井泰陀のコメント

「俺もお前のことはそう思ってるよ」

島田美波のコメント

「一応信頼できる友人かな？」

樽井泰陀のコメント

「そう思うなら関節攻撃は止めてくれ…つか一応ってなんだ」

芳司^{ホウシ ックシ}土筆のコメント

「私の幼馴染です。身長172・2cmで62・5kgのA型で1月23日生まれの子です。特技は腹話術と声帯模写で頭が良くて、得意科目は数学です。運動神経もいいカッコいい人です。普段はだらけてますが、それもお世話のしがいがありますし可愛いですよね。鴉の濡れ羽のような黒色の髪もサラサラですらつと手足も長くて普段は細い目も開けると引き込まれそうな青い瞳が綺麗で中性的な顔立ちには私だけでなく多くの男女を魅了していまい…」

樽井泰陀のコメント

「長くて読むのがダリイ」

クラス振り分け試験。それは、ここ文月学園で2年進級時に実施されるテストだ。

文月学園は科学とオカルトの偶然の産物である試験召喚システムを初めて導入した学園。最新技術の実験場としても扱われている。文月学園では2年から学力順にA～Fのクラスとなり、それによって生徒の扱いも変わるといって成績累進制がある。

つまり、この試験は今後の学園生活を左右する重要な試験！

…なんだが……

（ダリイ、やる気しねえ……）

俺は大絶賛だらけ中だった！

バカと怠惰と召喚獣

第1問「主人公はタルイ」

周りは忙しなく鉛筆を進める中、俺は開始30秒でギブアップした。だるすぎる。

紙に書いたのは樽井泰陀タルイ タイダという自分の名前のみだ。

（ま、クラス間で差が出ると言っても高が知れてるだろ…）

真面目にやれば上位に行くことも出来るだろうが、そんなやる気はない。俺のやる気スイッチは絶賛故障中だ。と、いうことでボーツとし始める。

（だれか知ってる奴はいないかね？）

いきなり寝ると監督の先生にど突かれるから人間観察でもしようかと辺りをざっと見渡す。

勿論、カンニング疑惑を欠けられない程度にな。

（ん、土筆ツクシじゃん）

一番前の列では董色のお下げ髪の少女がセコセコ問題を解いていた。た。

芳司土筆ホウシ ツクシ。俺の幼馴染。小学生の頃に苛められていた土筆をご近所の好で助けてやって懐かれた以来の付き合いだ。

成績はトップクラスとはいかないものの優秀で、ドジっ子のくせに運動神経は良い、顔良し、性格良し、上から84・56・85でスタイル良し、家事も良し、朝起こしに来てくれて、弁当も作ってくれて、ベットの所で保管している男のお宝を何の文句の言わずに本棚にタイトル順で並べてくれる完璧スーパーパーおさなしみ？幼馴染だ。

ドジとネガティブ思考が玉に瑕か。

小動物ちつくな動きをしながら、問題を解いてる後ろ姿は微笑ましい。

おそらく、俺が本気を出したらAクラス中下、土筆はBクラス程度の学力だからアイツは同じクラスになるために必死なんだろう。去年は組み分けで別のクラスになったら「この世の終わりです。自殺します」とか、言って寝めるのがだるかった覚えがある。

さて、このままじゃまた違うクラスだな…。

『コロコロコロ…コロコロコロ』

（なんだ、この音は…？）

7

（ころころつと…よし、この問題の答えは2だ！）

（……………）

音の方を見るとわりやすい馬鹿がいた。

鉛筆を転がして答えが出てくるわけがない。俺はそんな無駄なことをするくらいなら何も答えを書かない。

このバカの名前は吉井明久。ヨシイアキヒサ特徴バカ。特技バカ。とりあえずバカな俺の1年からの友人だ。

（よっしゃああ！ 次は5だ！ 今日のシャイニングアンサーは調子がいいぞ）

（……バカだ）

今更か。にしてもこの教室には俺が知ってんのはこの2人しかないじゃん。雄二とか別の教室かよ。

人間観察終了。どうするよ俺？ 早く帰らせてえ…

「ハッハッハッ！！ 僕のシャイニングアンサーに不可能はなあああい！！」

「吉井！！ 何騒いでる！」

「え、僕？ ハッ、まさか… 泰陀ッ！？」

「黙らんかッ！！」

「す、すいません…」

俺の特技、腹話術と声帯模写を使って明久の声で叫んでみた。思ったより面白くなかった。明久めッ……！

じゃあない、真面目に解くか。土筆をまた宥めるのも面倒だし、大体同じくらいになるように調節して…

『ガタンッ！！』

…なんだ？

「ひッ 姫路さん！？」

「吉井！！ 試験中だぞ席に着けッ！！」

続くのは明久の声と試験監督の声。

姫路か…確か明久が気にしてる女子だと思ったが…なるほど、ピンク色の髪の子が倒れている。あれは姫路だな。

顔色が悪く、息遣いも荒い。体調不良って所だな。

「姫路さん、早く保健室に！」

「姫路、保健室に行くか？ 試験中に退席したら無得点扱いになるがね」

「そんなッ！？ 先生、具合が悪くて退席するだけでそれは酷いじゃないですかッ！！」

明久と試験監督の口論。体調管理も試験の内ってか？

姫路も試験を受けない、もしくは途中退席では無得点で最低クラスの下に有無も言わずに所属になるから無理してたんだろ。アイツ、学校でもトップクラスの成績らしいし…ご愁傷様だな。

「……………退席します…」

姫路の退席を宣言する声は弱弱しい。体調不良と最低クラスのダブルパンチだから仕方ないかね？

（ん？ そうだ…退席すりゃ、試験受けなくて良いんだった！？俺としたことが忘れていた！！）

今日はサボろうとしたが、土筆に引きずられてきたからな。観念してたから失念してた。

「じゃ、俺が保健室に運ぶわ。先生が試験監督してなきゃカンニングしそうな奴も居るだろうし」

『えっ！？』

俺が申し出ると驚く声がチラホラと驚く声が、自分から無得点になろうとしてるから当然といえば当然だ。

「そうだな。監督は重要だ。行ってもいいが…樽井、お前も無得点になるぞ?」

試験監督は明久を一目見て俺に言った。

おい、明久。鉛筆なんて転がしてるから目え付けられてるぞ。

「構わないですよ」

俺の目的は試験を切り上げること、無得点なんて問題ないな。

「……なんで怠惰が? 面倒なことはしないんじゃない?」

「そう言う気分なんだよ」

普段の俺を見ていたら、疑問に思う行動だ。当然、明久は疑問に思ふのだろう。

試験退席のメリットがなけりゃ、しなかっただろうしな。

「じゃ、姫路連れてつたらもうすることないし、早退するんで。土筆いゝ、明久あゝ、じゃあなあゝ」

そう言っつて、姫路に肩を貸して有無を言わせず退席した。

(え? 泰陀くんが退席? 無得点?)

（もしかして、泰陀は姫路さんが好きだったのかッ！？ 芳司さんがいるのに！！）

残された教室には混乱する2人がいた。

「…あの、すいませんでした。私のせいで……」

「あゝ、謝らなくていいからな。テスト受けんの面倒くさくて退席したかったから、ちょい利用させてもらったんだわ」

「…でも」

保健室に着くと姫路が申し訳なさそうに言ってきた。弁明するも効果は薄い。

成程、姫路はこういう性格か。今、後腐れなくしなきゃするずるいきそうだ。

「じゃ、アレだ。2年の間、俺や明久、ああ…吉井明久な、あと多分土筆にその他もろもろとFクラスでダラダラと楽しくやろうぜ？

それでチャラってことで」

「え？ 貴方と吉井くん…ですか？」

「そぞ。ああ、俺は樽井泰陀、所謂サボり魔ね。明久はバカだからどうせFだろうし…土筆は俺の幼馴染だ」

「……あはは」

苦笑いする姫路、どうやら学校中で有名なバカの話は姫路の耳にも届いてたようだ。どうするよ？ 明久…。

「じゃ、2年はFクラスでよろしく頼むわ」

「…はいっ！ よろしく願います」

姫路はふんわりした桃色の髪を揺らし、綺麗な笑顔を浮かべ頷いた。

俺はそれに満足し、軽くあいさつして文月学園を後にした。

去年もそうだったが、今年はより一層、ダルくて、楽しくて、ドタバタして、面倒くさい学園生活を送ることになりそうだ。

主に明久が中心になってな…

第2問 自己紹介はタルイ（前書き）

苗字変更

宝施↓芳司

読みは変わらず

第2問 自己紹介はタルイ

問 ハウシ ックシ 芳司土筆はどのような人物か答えなさい。

樽井泰陀の答え

「ん、大事な幼馴染かね」

芳司土筆のコメント

「私も泰陀くんを大切な人だと思っていますよ」

吉井明久の答え

「泰陀を殴りたくなるね」

芳司土筆のコメント

「た、泰陀くんの前に私が相手になります」

坂本雄二の答え

「まるで泰陀の専属ご奉仕メイドだな」

芳司土筆のコメント

「そんな将来に憧れます」

木下秀吉の答え

「泰陀の世話係じゃな」

芳司土筆のコメント

「生きがいですね」

島田美波の答え

「友達であり敵でもあるわね。神は不平等よ……」

芳司土筆

「敵でもあるんですか!？」

土屋康太の答え

「……………芳司土筆。身長153cm、体重42kg。B84W56H85推定E。血液型O型、誕生日は3月21日。得意科目は家庭科。髪は董色で肩下までのおさげ髪、次いでポニーテールが多い。顔立ちは幼く、可愛い系でありながら体型はわがままボディ、おとなしめで家庭的、ドッジ子属性ありなどの点により男子に人気はある。しかし、本人は幼馴染の樽井泰陀しか眼中にないので多くの男子が涙を飲んでいるのが現状で……」

芳司土筆のコメント

「詳し…えっ!?! た、体重!?! スリーサイズ!?! わわわ、隠してくださいよ!?!」

新学年初日。

俺は土筆と共に学園に向かう。今日も土筆に起こされ、一緒に登校している。

「樽井、芳司。遅刻ギリギリだぞ」

「ういゝす、鉄人先生」

「おはようございます、西村先生」

校門に陣取っていたのは生活指導の鬼、西村教諭だった。そのガタイの良く、厳つい風貌や趣味がトリアスロンということから『鉄人』の異名を持つ豪傑だ。

「樽井、鉄人と言うなといってるだろう」

「いいじゃん、『鉄人』。トリアスロンはアイアンマンレースとも言うしピッタリじゃん？」

「全く、お前は…もういい」

なんで鉄人は鉄人と呼ばれるのが嫌なのか全くわからんね。ピッタリなのに…。

「それより、制服をきちんと着ないか」

「えゝ、ダルいじゃん？」

「やっぱり、言われましたね」

俺はワイシャツのボタンを2つ開け、ネクタイを緩めている。きつかったり、縛られたりは嫌いだ。

「ちょっと、じっとしててくださいね」

そう言っつて土筆は俺の制服を直す。生活指導につかまると大体こんなんだ。そして、その場をしのぎ、直ぐ戻す。いつもこのパターンだ。

「はい、出来ました」

「さんきゅ」

「全く。ほれ、自覚していると思うがこれがクラスだ」

俺達は鉄人に封筒を貰った。開いてみるとFの文字、当然だな。

土筆もF、あの後で書いた答案を全て消しゴムで消したらしい。

そんなことしなくても退席すりや良かったのに、真面目な奴だ。最も、本人はそんな労力は気にせずと同じクラスに慣れることを喜んでいた。

「樽井はもつと芳司に頼らずに生きようとは思わんのか？」

「土筆は嫌がつてないし、むしろ…」

「私が好きでやってるから良いんです」

鉄人の言葉に俺が答え、土筆が継ぐ。俺達の関係はこんなもん。

他人から見れば手のかかる男とそれに手を焼く幼馴染ってところか、自分達は気にしてないからそんなこと言われるもどうでも良いがね。

バカと怠惰と召喚獣

第2問「自己紹介はタルイ」

「泰陀と芳司か、いつも通り遅かったな」

「ういゝ、雄二」

「おはようございます、坂本くん」

Fクラスに入って最初に目に付いたのは教壇に立つ友人だった。
紅鳶色の鬘のような髪で長身の男子、坂本雄二^{サカモト ユウジ}だ。頭の回転は良
く、喧嘩が強い。小学校時代は『神童』、中学時代は『悪鬼羅刹』
と恐れられていたらしい。

「こんなトコで何やってんだ？」

「先生が遅れてるから代わりにな」

「じゃあ、坂本くんが代表なんですね？」

「その通り、これでこのクラスは俺の兵隊だな」

代表はそれぞれのクラスの成績最優秀者になる。

つまり、雄二は振り分け試験においてFクラスで最も成績が良か
ったって事だな。

「兵隊に出来んのはお前くらいだろうよ」

教室を見渡してFクラスのメンバーを見る。

寝てたり、マージャンしてたり、ゲーム、音楽、乱闘、儀式を好

き勝手にしてるような馬鹿たちに予想通りのムツツリ、演劇馬鹿、凶暴帰国子女、そして俺らとまだ居ぬ姫路と愛すべき大馬鹿いうクセの強い奴らをまとめることが出来るのは、いざという時に凄まじい統率力を発揮するこの雄二くらいだろう。そういう意味で雄二の代表は最も適任だな。

「それにしても、これが教室なのか？」

「その通りだ。これが嫌なら試召戦争で勝つことだな。お前らにも協力してもらおうぞ」

「えー、ダリイ……」

Fクラスの惨状は予想以上だった。正直、高くくつてたな。

古い畳に、ボロボロの卓袱台、薄い座布団、割れた窓……そして空気も悪い。

だが、それは教室に居れば問題だが、居なけりゃ問題ない。つまりはサバればおk。

「それにしても振り分け試験もサボってFクラスに来るとな、しかも芳司まで巻き込んで」

「別にいいだろ、だるかったし。それに土筆は自分で俺と同じクラスを選んだんだよ」

「はい、そうですよ」

「自分と同じクラスを選ぶことくらいわかってたんだろ？」

「まあ、9割9分な」

「分かっけてやるのは巻き込んだことになるんだよ」

「あ、チャイム鳴りました。泰陀くん席に着きましょうか？」

「そうだな。席は自由だったかね」

席はほとんど埋まっていたが、運よく最前列で2つ連続で空いているところがあり、そこに倒れた。

埃が舞った…これは酷い。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」
「早く座れ！！ このウジ虫野郎」

卓袱台に顎を乗せてボーっとしてたらアホな声と雄二の怒鳴り声を聞いたので目を向けてみた。

見えたのは馬鹿面をさらす明久だった。桑茶色の髪で少し外に跳ねた髪のファニーフェイスは学園で最も馬鹿な男として有名だ。そんな男は当たり前のようにFクラス。俺の予想通りだった。予想するまでもなかったがね。

「泰陀くん、起きてください」

いつの間に眠りに入っていたのか…俺は土筆に揺すられて目を覚ました。

教卓には雄二ではなく、知らないオッサンがいた。誰だアレ？

「担任の福原真先生です」
フクハラシン

土筆は俺の疑問を先回りして答える。良く出来た幼馴染だ。

「自己紹介をお願いします」

くたびれた中年の男が具現化したような福原先生が言う。どうやら自己紹介の最中らしい。

「だる…樽井泰陀。よろ」

手っ取り早く、二言ですます。勿論、立ち上がったりはしない。しかし、特に何も言われなかった。どうやら、このFクラス、こういうことは緩いらしい。

「ワ「私は芳司土筆です。泰陀くんともどもよろしくお願いします」

俺の後ろの奴が自己紹介を始めたのを遮り、土筆が自己紹介を始めた。

言い終えた後でそれに気付き、ワタワタした後へコヘコと後ろの奴に謝るって後ろは秀吉だったのか…。

「コホン。ワシは木下秀吉キノシタヒデヨシじゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

気を取り直して自己紹介した秀吉。俺の友人。演劇バカ。可愛らしい顔立ちに肩まである樺茶色の髪に2つのヘアピン。どう見ても美少女にしか見えないが、男子だ。

「……………ッチャ コウタ
土屋康太」

俺でも二言だったのに一言で済ましたのが康太。コイツは面倒だからではなく、無口なだけだな。群青色の髪、垂れ目の小柄な男子。保健体育のみ異常な成績を誇るいろいろな意味でなかなか油断できない友人だ。

「シマダ ミナミ島田美波です。ドイツ育ちで日本語は読み書きは苦手です。趣味は吉井明久を殴ることです」

このピンポイントで危険な趣味を持つのが島田。真紅色の髪を黄色のリボンで頂までの長さのポニーテールにしている女子で、洗濯板である。たまに俺も標的にするのは勘弁してほしい。攻撃方法は打撃、間接技、プロレス技と多彩だ。頭は悪くないのだが帰国子女で日本語が苦手のため、問題事態が読めないことも多いからFクラスになったのだと思われる。

「えーつと吉井明久です。気軽に『ダーリン』って読んでください
ね」

『『『『『ダアアーリインー!!』』』』』

「——失礼。忘れて下さい。とにかくよろしく願います」

明久の言葉の返しに野太い声が響いた。激しく不快だ。声はでかいし、気持ち悪い。隣にいる土筆はフラフラしていた。って、おい、明久、お前も気持ち悪そうな顔すんなよ…自分で蒔いた種だろ。

「あの、遅れてすいま…せん」

『『『『『え?』』』』』

自己紹介も順調といったところ、女子生徒が遅れて教室に入ってきた。姫路だ。

「丁度よかったです。今、自己紹介をしているところなので姫路さんをお願いします」

「は、はい! あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…」

遅れてきたからかわてている様子だ。

姫路瑞希。ヒメジ ミズキ桃色のふわつとしたロングヘア、ウサギの髪飾りと可愛いという言葉が服を着て歩いているような女子生徒。胸はムツリー二によると推定F、学年次席レベルの成績つて所か、何か土筆と通ずるものがあるな小動物っぽさとか…

そんな中、当然沸き起こる疑問はなぜ姫路瑞希がFクラスなんかにいるか、俺や、土筆、明久あとは雄二あたりなら体調不良で退席したと知ってるが、ほとんどの人は理解できない状況だ。

「なんでここにいますか?」

しかし、いくらなんでもこんな聞き方はないだろう…。

途中、教卓が壊れるハプニングがあったが、自己紹介はようやく最後の1人を残すのみとなった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

雄二は教卓の前に出て自己紹介を始める。わざわざ、教卓まで出てくるなんて何か始めるつもりか？

「さて、皆にひとつ聞きたい。Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが………不満はないか？」

『『『『大ありじゃッ!!』『』『』『』』

新事実発覚である。Fクラスの酷さには驚いたが、Aクラスの設備は逆にかなりのものらしい。しかし、屋上で寝る分には関係ないな。

「だろう？ 俺だってこの状況は大いに不満だ。そこで代表としての提案だが…FクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

雄二は力強い目と言葉で宣言した。

試験召喚戦争…試召戦争か。しかも最低クラスのFクラスが最高クラスのAクラスに対して。これはまた、面倒なことを思いついたもんだ雄二も…

第3問 Fクラスはタリイ

問 『文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および召喚戦争のルール』について答えなさい。

吉井明久の答え

「えーっと、なんだっけ？」

坂本雄二のコメント

「バカが。しっかり覚えておけ」

木下秀吉の答え

「負けたクラスが勝ったクラスに教室設備を明け渡すんじゃ」

坂本雄二のコメント

「それは勝敗後の結果だ」

樽井泰陀の答え

「メンドイ、パス」

坂本雄二のコメント

「書くのが面倒なだけだよな？」

姫路瑞希の答え

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死にいたると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受け直して点数を補充することで何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を喚びだしたにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象になる。

八、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北を持つてのみ決定される。この勝負に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を

常に意識すること。

坂本雄二のコメント

「流石だな。一字一句のミスもない」

教室がざわめく。

「勝てるわけにはいかない」「これ以上、下の設備になりたくない」「姫路さんや芳司さんが居れば何もいらぬ」といった消極的な言葉が流れている。

それも当然、雄二はバカが天才、秀才にテストで勝つといつてるよおうなもんだ。しかし、雄二のことだ何かくでもない策を張り巡らし、上位クラスに対等、そしてそれ以上の戦いをするつもりなのだろう。

……ほら、案の定

「必ず勝てる。その根拠を今から説明してやる」

不適に笑いながらこんなことを言いやがった。

バカと怠惰と召喚獣

第3問「Fクラスはタルイ」

「おい、康太。いつまで畳に顔付けて姫路のスカートを覗いてる」
「……………（ブンブンブンブン！）」
「は、はわっ！？」

康太は雄二の言葉を必死に否定するが、頬には畳の跡という動かぬ証拠があった。

「土屋康太。こいつがあ有名な、ムツリーニ寡黙なる性識者だ」

ムツリーニ『寡黙なる性識者』とは康太の異名。

簡単に言つと、とんでもないムツリスケベである康太に対して男子は畏怖と畏敬を、女子は軽蔑を以て呼ぶ名だ。

実はコイツ『ムツツリ商会』なるものを作つて盗撮写真やグッツを売っている。それには俺も協力している。この学園は頭が良い奴でも頭のネジがぶつ飛んでる場合が多々ある。例を挙げるなら、おそらくAクラスに居るであろう久保利光は頭がクボ トシミツいいのに明久に対して多大な興味を持っているという。そいつらが商品を破格で買う、俺は楽に設けられるという寸法だ。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。ウチの主戦力、皆だつてその力によく知っているはずだ」
「えっ？ わ、私ですか？」

姫路ならAクラスでも一握りしか相手は出来ないだろう。学年トップレベルは伊達じゃない。

「演劇部のホープ、木下秀吉だっている。秀吉の姉はAクラスの木下優子だ」
シタ ユウコ

秀吉の姉には会ったことないな。話を聞いたことはあるがね。

「当然、俺も全力を尽くす」

雄二が、居なきゃこのクラスは負けるだろ。

「それに『怠惰の悪魔』と『ご奉仕メイド』の2人がいる。この名を聞いたことがある奴も多いはずだ」
ヘルフェゴール

そう言って俺と土筆の方を雄二は指差す。

「つか、それなんだ？」

正直、初耳だった。

「お前らの通り名だ。怠惰に塗れてるが怒らすと怖い『怠惰の悪魔』こと樽井泰陀とそれをご主人様のように尽くし、世話をする『ご奉仕メイド』こと芳司土筆。お前らにぴったりじゃないか」
ヘルフェゴール

なんだそれ？ ぴったりってなんだよ。確かによくサボるが。隣を見ると土筆は満足そうな笑顔だった。どうやら、このフレーズが置きに召したらしい。

「どうしましたか？ ご主人様」

などと言いやがった。

『何、ヤツがベルフェゴールだと！？』

『授業はサボる、出ても寝るか呆けているから怠惰、そして美少女を侍らせていることから色欲。だからベルフェゴールだったはず』

『芳司さんは美少女だから確かに当てはまるぞ』

『同棲してるって聞いたぞ？』

『何ッ！？ 夜な夜なあんなことやこんなことをするのか！？』

『『『『許せんッ！！』』』』』

何故か話が飛躍していた。面倒くさい。

同棲はしてねえよ、一緒に住んでるだけだ。当然だが夜は一緒に寝ないしな。

「泰陀ッ！ 君がそんなヤツだったなんて」

『芳司さんを救わなくては！』

『ヤツは敵だ！』

「私が好きでしてるんです。泰陀くんは悪くありません」

『な、芳司さんを盾にしただとッ』

『なんてヤツだ…まさに悪魔』

『芳司さんは悪魔に洗脳されてしまったのか…』

「何、この茶番」

「泰陀くん、大丈夫ですか？」

明久を始めとしたFクラスの面々が俺に向かって構え、土筆がそれに立ちはだかる。

つか、コイツらの頭の中はどういう構造をしているのか…きっと

面倒いことになってるに違いない。

「お前ら、話の途中だ。戻って来い」

「でもっ、雄二！」

「そして最後に！ コイツ、吉井明久が居る」

……シーーーーーン

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要はないよね！？」

『誰だよ吉井明久って』

『それ以前にこのクラスにいたか？』

『聞いた事ないぞ』

「僕だよ！ さっき悪魔退治しようって一致団結したじゃん！？ うわっ！ なんか微妙な空気になっちゃったよ！！ 僕は普通の間なんだから普通の扱いをって何で僕を睨むのかな？ 僕は悪くないよね？」

雄二の言葉に明久は一気にパニックに陥る。

明久、大丈夫だ。お前が普通なわけがない。お前は馬鹿だ。

「そうか、知らないのなら教えてやる。コイツの肩書きは――『観察処分者』だ」

『……それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ちッ違つよ！！　ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で…」

「そうだバカの代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二！」

バカと言われて明久は憤慨するが、お前は本当に自分がバカではないと思っているのか？

「あの、それってどういうものなんですか？」

「具体的には教師の雑用係だな。特例として物に触れるようになった召喚獣で雑用をするが、そのときに受ける疲労やダメージなどの負担は幾分か本人にフィードバックをする」

姫路は観察処分者について知らないようで雄二に尋ねた。そして雄二は答える。

観察処分者にはそれほどメリットはない。

『おいおい、それじゃ召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ？』

『それならおいそれと召喚できないヤツが1人いるって事だよな？』

そう。むしろデメリットの方が目立つ。

「気にするな！　居ても居なくても大して変わらん雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローするところだよな？」

そう締めた雄二に明久が不満をこぼした。

そして、微妙なままの空気。俺らや明久のくだりは道考えてもいらなかっただろ士気がだだ下がりだ。

雄二は士気を壊して何がしたかったのか。案外、明久をいじりたかっただけかも知れん。

「とにかくだ！ 俺たちの力の証明としてまずはDクラスを征服してみようと思う」

雄二は強引にまとめに入った。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？」

『『『『『当然だ！！』』』』』

「ならば全員筆^{ペン}を取れ！！ 出陣の準備だ！」

『『『『『おおー！！！！！！！！！！ッ！！』』』』』

「俺達に必要なものは卓袱台じゃない！ Aクラスのシステムデスクだ！！」

『『『『『うおおー！！！！！！！！！！ッ！！』』』』』

そして直ぐに士気が最高潮になる。姫路まで小さく手上げてるし。バカを乗せるのが上手いというかなんというか…。

「かったりいことになりそうだ」

「泰陀くんは試召戦争は嫌ですか？」

何気に呟いた声に土筆が反応する。

「うい。つか、嫌というよりダルい。俺にとっちゃ教室の設備なん

てどうでもいいしな。教室には屋根と壁と莫^{トキ}蔭、それとお前が居れば十分だ」

そもそも、土筆がいりゃ大抵の事が何とかかなりそうだしな。

「それは嬉しいですけど…泰陀くんには楽しい学園生活を送ってほしいです」

そんな嬉しさと不満が織り交ざった微妙な表情されてもな。

「楽しみ方は人それぞれだな。怠け者は怠け者なりに傍観するなり、気分や条件次第で混ざるなりするさ。それより、お前こそ好きに混ぜていいんだぞ？」

「いえ、私は泰陀くんと一緒に居たほうが楽しいですから」

正直、怠け者な俺より依存入ってる土筆の方が心配なんだが…。

「2人とも相変わらずじゃのう」

「ん、秀吉か。今年もよろしくな」

「木下くん、よろしくお願いします」

「こちらこそ、じゃな。それにしてもお主なら上位のクラスにいたじやろうになんでFクラスなのじゃ？」

「かくかくしかじか」

「まるまるつまつま。つまりは説明するのが面倒なのじゃな？」

「泰陀くんは途中退席で私は白紙で出したからです」

「土筆、ご苦労」

「まさかとは思ったがやはりじゃったか…」

「……………泰陀、例のものを」

「ん、康太か。アレだな」

「……………報酬は口座に」

秀吉と話していると康太もやってくる。

例のもの、USBメモリを渡す。中身は『女王様 佐渡S子（仮名）の罵り語録 〈精神崩壊編〉』の元データだ。これは俺が声帯模写スキルを駆使して康太の台本を読んで録音したもの、つまりはバイトだな。

「泰陀、試召戦争頼むぞ。サボるなよ？」

「樽井、土筆、2年もよろしく」

「樽井くん、皆さんよろしくお願いします」

話していたら、雄二や島田、姫路も来たようだ。主要メンバー全員集合って…

「明久はどうした？」

「私も分かりません」

明久の不在に疑問を持ち、尋ねるといの一番に土筆が答えた。

「ああ、明久はDクラスの宣戦布告の使者になってもらった」

「生贄ね」

下位勢力の使者の末路は大体察せる。

「試召戦争は明久が言い出したことでもあるんだ。そのくらいはやらせないとな」

「明久がねえ」

「何ででしょう？」

「大方、Aクラスの設備が羨ましかったんじゃない？」

「明久じゃし、それが妥当かのう」

でもあるってことは雄二もするつもりだったと考えるのが妥当か。
明久も雄二も何でこんな面倒なことしたがるのかね。

第4問 試召戦争はタルイ

問 以下の問いに答えなさい。

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの変わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。

姫路瑞希の答え

問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であると言う点。

合金の例…ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目と言っ引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

樽井泰陀の答え

問題点……Mg

教師のコメント

色々和省きすぎです。

芳司土筆

問題点… 泰陀くんは鍋を作るなんてしないと思います。

教師のコメント

樽井君のことは聞いていません。

土屋康太の答え

問題点… ガス代を払ってないなかったこと

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

合金の例… 未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント

すごく強いといわれても。

「騙されたあつ！！ こッ殺されると事だった！ アイツら物凄い剣幕で？ みかかってきたぞ！！」

馬鹿が駆け込んできた。

「やはりきたか」

「吉井君大丈夫ですか？」

「あつ、姫路さん。大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「本当？ 良かった…まだウチが殴る余地はあるんだ……」

「ああ！ もうダメ！ 死にそう！」

なぜ、明久が来ただけでこんなにも愉快なことになるのだろう。

「そんなことより今からミーティングを行うぞ」

「うえ…雄二、俺はパスで」

「泰陀くん、ミーティングは参加しておいたほうが良いのではない
でしょうか？」

「土筆よ、俺にはダラけるという崇高な儀式を行わなければいけない
のだよ。つこんで、聞いといてくれ」

「はい。じゃあ、お昼休みに一緒にお弁当を食べながらお話します」

「おけ、頼むぞ…」

いや、やっぱり土筆は頼りになるね。

「さっきサボるなと言ったばかりだろ」

「雄二、いいだろ？ 面倒いんだよ…」

「そついうと思ってたからな…これだ」

雄二が差し出したのは封筒だった。

「悪い、雄二が俺のことをそついうふうに思ってるとは知らなかった…」

「えッ！？ 坂本くんってそついう人だったんですか！？」

「なぜこれがラブレターに見えるッ！？」

「いてッ！？ 殴ることないだろ…冗談なのに」

「泰陀くん、大丈夫ですか？」

「それ、呼んどけよ？」

「へえへえ」

全く雄二は冗談に反応しすぎだ。

「…何色だった？」

「みずいろ」

「おい、明久、ムツツリーニ。馬鹿なことしないでさっさと屋上へ来い！」

雄二たちが去っていったところで封筒を開けて中身を見える。

中身は…

『秀吉キュンは僕のものだ！』

『秀吉キュン可愛いよ。秀吉キュン』

『秀吉キュンのふとももをペロペロしたいお！』

『お前ら！ 僕の秀吉キュンに触るんじゃないやねえ！ 下がってろ！』

『僕は秀吉キュンと一緒に幸せになるんだ…ぐへへへへッ……』

『あ、明久キュン！ ち、違っただッ！ 僕は明久キュンの方が好きだ！！』

怖気にする文の羅列が目に入った…気持ちわりい……。

バカと怠惰と召喚獣

第3問「試召戦争はタルイ」

「泰陀くん。はい、あーん」

「あー、むぐむぐ。で、ミーティングはどうだったんだ？」

今、俺は屋上で昼食中だ。

土筆の手作り弁当、しかも自分は手を使わなくていいというおまけつき。一家に一家に一台、もう手放せない。

「えつとですね…吉井くんの主食が水と塩で姫路さんがお弁当を作ってくると言っていました。泰陀くんは姫路さんのお弁当食べたいですか？」

「興味はあるけど土筆の弁当の方がいいわ。俺の好みにあってる」

土筆の料理の腕前は相当なものだ。餌付けされてしまった。俺？俺は料理なんてしない。面倒だし。

明久はアレだ。親からの仕送りをほとんどを漫画やゲームに費やす。馬鹿だからしょうがない。

「そうですか、ありがとうございます」

土筆はいい笑顔で言う。土筆は俺に褒められたり、役にたつことが好きだからなあ…。

「あ、後は吉井君が瑞希ちゃんのことを好きにしたいと思ってたっ
て言っていました！」

「アイツは馬鹿か…いや、馬鹿だったな」

全く、明久は何をやっているのか…。

つか、ミーティングの内容聞いてたはずだよな……。

「まだ、ここに居て良いんでしょうか？」

「いいだろ…面倒だし…それにDクラス程度じゃ俺が出るまでもないだろ。姫路も居るしな」

「瑞希ちゃんも回復試験中ですよ？」

「……………」

「黙らないで下さいよ！」

俺と土筆はDクラスとの開戦時刻になってもまだ屋上に居た。

所謂、食休みだ。土筆の柔らかい膝が気持ちいい。直ぐにでも寝れ
そうだ。

「回復試験…やらなくてもいいんですか？」

「眠い。悪いのはこの枕だ」

「ひゃん！ きゅ、急に撫でないで下さいい」

「急にじゃなきゃいいのか？」

「……はい。当たり前、です」

「…ったく」
「あっ……」

膝ではなく頭を撫でる。

土筆は目を細めて嬉しそうにしている。全く、可愛い奴め…。

「兎に角、回復試験はまだ受けなくてもいい。次までに受ければ大丈夫だろ」

「次ってAクラスですか？」

「んにゃ、次はBクラスだな」

「坂本くんはそんなこと言ってませんでしたよ？」

「俺は教えられたんだよ。Dクラス戦はいいからBクラス戦では働けつてな」

「そうなんですか？」

「そそ、だからこのサボりも公認なのだよ」

「？ はあ……」

疑問に思う土筆。

まあ、当然だな。俺もそういう風に言われたわけではないからね。

「さて、今日はやることないし…このまま寝るか」

「子守唄、歌いますか？」

「子供か。でも、偶にはいいな、土筆の歌を聞きながら寝るのも…」

「はいっ！」

静かに聞こえてくる旋律…

心に安らぎを齎す歌声…

整った顔、風に揺れる髪、柔らそうな唇…

思えば、あの苛められっ子がよくここまでなったもんだ。いや、コイツは昔から可愛かったか…。

でも、きつと付き合おうとかは言わないだろう。土筆を見るとそう思う。

ピンポンパンポーン《連絡致します》

《船越先生、船越先生》

《2年Fクラスの吉井明久君が体育館裏で待っています》

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「ッブ」

「あはははは…」

心身ともに土筆に預けて安らいでたのに台無しだ。

「アイツら何やってるんだよ…」

「きつと頑張ってるんですよ」

ちげえねえ、と土筆と笑いあう。

あいつらが面白おかしくやってるからか、それとも土筆の歌を聴いて気分が良かったのだろうか…。俺はBクラス戦からは出てもらいかも思っていた。それを土筆に伝えると「泰陀くんは優しいですから」と返される。俺はそんなに優しくないはずなんだがね。

優しいです、そんなんじゃない、優しいです、違えよ。普段ならやらないような面倒なやり取りをしばらくしていた。

「最近、幸せで怖いです」

ふと、土筆がこぼした。

「また、それが…」

「…はい。幸せの次は不幸が来ますから」

「そりゃそうだ。ずっと幸せで居られるような頭がお花畑で出来るような奴がいるならここに連れて来い。殴ってやるぜ」

「……………」

「反応しろよ」

「……ごめん、なさい…」

また、始まった。

これは土筆の定期的な病気みたいなものだ。どうしても思考がネガティブになり、よくない方向に沈んでいく。

「…あの、泰陀くん」

「なんだ？」

「…泰陀くんは私を捨てないですよね？」

「ああ、一緒に居てやるよ。つか、お前が居ないと俺生きていけないだろ」

そのくらい土筆には世話になりっぱなしだ。

「…はい」

「肯定すんなや」

軽く抱きしめて落ち着かせる。

土筆の母子は父に捨てられた。その記憶が甦るのだろうか…このように確認されるのも今まで何回もあった。

最初に聞かれたときにずっと一緒かなんて聞かれても分からない、と答えたら顔が絶望に染まり、俺は母さんに半殺しにされたのは消したい記憶の1つだ。

「落ち着いたか」

「…はい」

しばらくして、土筆は落ち着いたようだ。

「あの、面倒だったですよね…」

「アホ、お前なら別だ」

まだ、ネガモードか？

「ほら、行くぞ」

「どこにですか？」

「回復試験。次は皆と楽しくやってやろうじゃないか」

「…はいっ！」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

「え？　せっかく普通の設備が手に入るのに？」

「ただし、条件がある。Bクラスの室外機を動かなくして欲しい」

FクラスはDクラスに勝利した。

放送室ジャック、窓ガラス破壊、消火器噴射。

下校する生徒に紛れてゲリラ戦、その中に姫路を隠しカモフラージュ、Fクラス姫路の存在を知らないDクラス代表の平賀はまんまと雄二の策にはまり、姫路にやられた。

「よ、勝ったみたいだな」

「ああ、滞りなくな」

「どこが滞りなくだよ！　僕が大問題だよ！　僕の貞操が大問題だよ！」

「問題ないな」

「明久、貞操が大問題ってお前が変態、つか変質者っぽくきこえるぞ」

「あんたら鬼だッ！」

船越先生は婚期を逃して、ついには生徒達相手に単位を盾に交際を迫るようになった、危険人物だ。でも、どうせ明久だ。問題ない。

「あッあの、樽井君ッ！　き、聞きたいことがあるんですけど……」
「ん？　姫路か。なんだ？」

姫路に声をかけられて、雄二たちから少し離れる。

土筆が半歩後ろからついてくるのはデフォだ。姫路も気にしていないからいいのだろう。

「あ、あの。皆さんにお弁当を作るんですが、吉井君はどんな料理が好きなんでしょう？」

「へえ、皆の弁当を作るのに明久の好きなもの聞くんだな？」

「え、あ、あのッ！　そ、それはですね！」

「泰陀くん。苛めたらかわいそうですよ」

姫路がわたたと動揺し、土筆に窘められた。つい、魔が差しただけだつて。

「あー…、明久は料理なら喜ぶだろ。あいつは砂糖、塩、水。いい時でカップ麺だからな。手料理なら喜ぶだろ。姫路の手料理なら尚更だ」

唯一の例外は食えない料理だろうが、自分から弁当作るって言ったらしいし、それはないだろう。

「私、ですか？」

「そそ、アイツ美少女の手料理なんて食ったことないだろうし」

「泰陀くん、それはいいすぎですよ」

「でも、あいつ土筆の弁当よこせって突っ込んできたぞ？　お前に撃墜されたけど」

「泰陀くんのために作ったものですから…」

「あ、あの…」

「わり、空気だった。大丈夫さ、アイツなら何でも喜ぶだろ」

「そうですね。男の子ですから、唐揚げやハンバーグとかエビフライとかのお肉や揚げ物がいいと思います。お野菜もアスパラの肉巻きやピーマンの肉詰めなんかがいいかもしれません。あ、ピーマンの肉詰めはハンバーグとかぶってしまいますね。ご飯はおにぎりがいいですよ。気持ちを籠めるんです。瑞希ちゃんが吉井君に喜んで

欲しいっていう想いを。お弁当で1番大切なのは気持ちだって泰陀くんが言ってくれました」

「土筆ちゃん…ありがとうございます」

「お前いつの話してんだよ」

「私が始めて泰陀くんにお弁当を作った時ですよ」

「言わんでいいし」

「樽井君優しいんですね」

「はい、泰陀くんは優しいんですよ」

なぜ、こんな面倒くさい空気になった。俺は優しくねえっての。

「まったく…話はそれだけか？ 帰るぞ？」

「あつ、あともう1つだけ…吉井君は何で試召戦争をやるうと言い出したのでしょうか？」

「あれ？ 吉井くんがAクラスの設備を羨ましいと思ったんじゃないんですか？」

「いえ、なんとなくそうじゃない気がするんです…」

明久の真意ねえ…

「馬鹿の考えることは分からん…俺より雄二に聞いたほうがいいんじゃないね？」

「そうですね。吉井くんと坂本くんはすごく仲良いですから」

「…そうですね」

「じゃな」

「瑞希ちゃん、また明日」

「はい、また明日」

さて、帰るかって……

「なんて顔してるんだ明久」

「いやいや、別に姫路さんのスカートめくり放題だと思ってないからね？」

「何でそうなった…」

「コイツが馬鹿だからだろ」

「吉井くん最低ですよ」

アホなことを考えていた明久に俺、雄二、土筆の非難が集中し…

「この勝ち組があああッ！！」

何故か俺の方に殴りかかり、

『ガッ！！』

土筆に沈められた。

「帰るか…」

「はい！」

「あ、雄二。アレは明日でいいのか？」

「ああ、頼む」

「今日はサボらせてくれたしな…やってやるよ。じゃあな」

それにしても姫路がねえ。明久の奴、もしかしたらもしかするか？

第5問 弁当はタルイ

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

(1) 得意なことでも失敗してしまうということ

(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

(1) 弘法も筆の誤り

(2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

樽井泰陀の答え

(1) 姫路の答えに同じ

(2) 同上

教師のコメント

そんな回答が許されるわけないでしょう。

芳司土筆の答え

(1) 猿も木から落ちる

(2) 負の連鎖

教師のコメント

負の連鎖はことわざではありません。

土屋康太の答え

(1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

(2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか。

「吉井ッ！！」

『ガッ！！』

「ぐぶあッ！！」

島田の蹴りにより明久が宙に舞う。

「あんたのせいで彼女にたくないランキングが上がっちゃたじゃない！」

凶暴島田より上に居る奴は誰なんだ？

「——と、本来は？みかかっているんだけど」

？んではないけど既に蹴っ飛ばしたな。

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる。そうそう、一時間目の数学のテストだけど…監督の先生、船越先生だつて！」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

明久は消えた。

俺も屋上辺りに消えるか…

バカと怠惰と召喚獣

第5問「弁当はタルイ」

「泰陀くん、泰陀くん。お昼ですよ？」

「ふぁー…土筆か？」

「はい！」

午前中を盛大にすっぱかし、屋上で睡眠していた俺は土筆に起こされた。

「ういゝ、今日は何だ？」

「今日はですねー」

「お、やはりここにおったようじゃな」

「こんにちは、樽井君」

「……………お昼」

「泰陀、姫路さんがせっかくお弁当を作ってくれたのに教室にいないなんてひどいじゃないか」

今日の弁当は何か聞こうとしたら、明久たちが屋上に来た。

「どうしたんだ？」

「姫路さんの芳司さんへの宣戦布告さ」

「お弁当を作ってきたので土筆ちゃんや樽井君にも食べてもらいたくてですね」

「じゃが、泰陀は1限目から居らんかったし、芳司も昼になったら直ぐ消えたのでの」

「……………探しに来た」

「と、いうわけじゃ。どうせ、屋上辺りにだと検討もついていたしのう」

大体分かったが、宣戦布告って何だ？

「美波ちゃんと坂本くんはどうしたんですか？」

「2人は飲み物を買ってきてくれています」

「僕の飲み物が安全か心配になる組み合わせだよな」

「とりあえず準備でもするかろう」

「でかいな」

「私たちのお弁当はどうしましょう」

「それなら僕が——」

「いや、ちゃんと食べるさ」

姫路が出したのは弁当箱ではなく重箱だった。気合の入りが伺える。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

「おおっ！」

姫路がそう言って蓋を取った。

土筆の意見を参考にしたらしく唐揚げ、エビフライやアスパラベーコン、そしておにぎりが詰まっていた。見た目も良い、姫路は謙遜してるが、なかなかの腕らしい。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――」

「……………（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムツリーニっ」

「こらっ！ ダメですよ。1番最初に食べるのは吉井くんです」

「何で僕？」

ムツリーニが明久が狙っていたエビフライを掠め取るうとして、土筆に阻止された。あれは姫路が明久の為に作ったようなものだし、女として思うところがあつたんだろう。

「僕より泰陀が食べるべきだよ」

「なんでだよ」

「これは姫路さんがたい――」

「あの、私のお弁当何か変でしようか？」

「いや、そんなことはないぞい」

「……………（コクン）」

「ほら、吉井くん！ 早く食べてください」

「吉井君！ あ、あの…どうぞっ」

「ほら、明久ご指名だぞ」

「姫路さんが言うなら…」

「うぐッ!？」

バタン ガタガタガタ

「……」

「わわっ、吉井君!？」

明久がぶっ倒れて小刻みに震えだしたのだとッ！

「いやあ、おいしいなあ……あまりに美味しいもんだから一瞬意識が飛んじやったよ」

「あ、お口に合いましたか？ 良かったですっ！ 皆さんも良かったらどんどん食べてくださいね」

明久が最もらしく言っているが、顔は笑顔を装うとしているが引きつっているし、体はまだ小刻みに震えている。

（さて……どう思う？）

（どう考えても演技には見えん）

（……………危険）

（でも吉井くんですから、女の子の手料理で昇天して、歓喜のあまりに体が震えていると考えられなくもありません）

（それは酷いのか優しいのか判断に困る言じゃな）

（女の子の味方なんです。1番は泰陀くんですけど）

（土筆、アレはフォローになってなかったぞ）

姫路に聞こえないような小さい声で俺達は会話を始めた。

（やっぱり、変だと思ったんだ！ 僕は毒味役だったのか！！）

明久も復活して会話に参加する。

（泰陀！ 次は泰陀の番だよ！ 姫路さんの気持ちを台無しにするつもりッ！？）

（俺に死ねと？）

（そ、そんなわけないじゃないか。とても美味しかったよ）

（お主、自分で毒味とかいってたぞい）

（しまったあああああ！？）

（そもそも瑞希ちゃんの気持ちを考えたら吉井くんが食べるべきで

はないでしょうか？)

(なんでッ！？ 泰陀が食べるべきだよ！？)

(お前、俺を貶めたいだけだろう？)

(違うつて！ だって、姫路さんは…それに泰陀だって！)

(仕方ありません。ここは私が…)

「瑞希ちゃん、この卵焼き美味しそうですね。どうやって作ったんですか？」

「あ、それはですね。男の人は甘いものは苦手だとよくいうので塩風にするために塩酸を使って美味しくなるようにアミノ酸を使ったんですよ」

「………」

「…味見はしましたか？」

「いえ、皆さんに少しでも多く食べて欲しいですからっ」

塩酸？ まあ、アミノ酸は許そう…でも塩酸？ 塩の代わりに塩酸。なぜ、塩酸が家にある！？ そして、当然のように料理に使った！？

どうやら姫路を見くびってたらしい。

「おう、待たせたな！ へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

「あっ！ 雄二」

雄二が現れて、明久が止める暇もなく卵焼きを口の中に入れる。

ボタン ガタガタガタ

「さッ坂本！？ ちょっと、どうしたの！？」

案の定、雄二もぶっ倒れた。遅れてきた島田が雄二に駆け寄る。

（毒を盛ったな？）

（毒じゃなくて姫路さんの実力だよ…）

「ああ…すまん。あ、足がつつてな……」

「あはは、ダツシユで階段の昇り降りしたからじゃないかな？」

「うむ、そうじゃな」

「……………（コクリ）」

「そうなの？ 坂本って充分鍛えられてると思うけど…」

雄二は倒れた原因を足が攀ったことにしたらしい。明久のフォロ―があっても無理がある。現に島田は不審に思っている。

「ところで島田さん。その手についてるあたりでさ、さっき虫を潰しちゃったんだよね」

「ええッ！？ 早く言つてよ！」

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方が良いよ？」

「ハア…そうね。ちよつと行ってくる」

明久はとりあえず島田を退避させたようだ。

（明久ッ、今度はお前がいけ！）

（嫌だよッ！！ 僕はもう毒味させられたんだ！ 泰陀がいくべきだよ！）

（何で明久は俺に固執すんだよ… 康太でもいいじゃねえか）

（……………ブンブンブンブンッ！！）

（私はやっぱり吉井くんに食べて欲しいですけど…）

（芳司さんは僕を殺すつもりなのッ！？）

（流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍るわい……）

（いつそのこと不味いつて言うか？）

（雄二！ そんなこと言ったら姫路さんが傷つくよ！）

（なら明久、お前が全部食え！）

（いや、それは僕が死んじやうから…泰陀で！）

（話が元にもどってるぞい）

「うつわぁあい！ 姫路さんの手料理は僕が全部食べちゃうぞお！
すごく美味しかったし！」

全員がバツと明久を見る。

「え？ ええええええッ！？」

明久は動揺する。

実は面倒くさくなった俺が明久の声で言ったのだ。もちろん腹話術を使って悟られないようにして。だが、ここに居る姫路以外のメンバーは俺の特技を知っているし、納得したようなホッとしたような良くやった言いたげな表情をしている。明久を除いてだが…姫路が明久の為に作った弁当だからこれが妥当だ。

「え？ 吉井君、こんなにいっぱい食べちゃうんですか？」

「ああ、そうだ姫路。アイツはいつも塩と水ばかりなんだ。こんなに美味しい料理なら独り占めしたくなるさ。俺達はいつもちゃんとした食べ物を食ってるからな」

「今回は明久に譲るか…な、康太、秀吉」

「……………惜しかった」

「う、うむ…………」

雄二に俺がノリ、康太や秀吉も追従させる。これで逃げ道は塞い

だ！

「でも、土筆ちゃんや泰陀くんにも食べて欲しいです。お礼をした
いですし…」

「そ、そうだよね！ やっぱり泰陀が食べるべきだよ」

「じゃあ、今度泰陀くんの家と一緒に料理しませんか？」

「いいんですかっ？」

「はい！」

明久があくもその道は土筆に塞がれた。何気に俺もいつか姫路
の料理を食うことになりそうだが、土筆が一緒なら大丈夫だよな？
フラグじゃないよな？

「ほら、明久食っていいぞ？」

「ありがたく思えよ？」

「明久、頑張るのじゃ！」

「……………（グッ）」

「吉井くんファイトですよ！」

「吉井君、どうぞっ！」

「う、うん、わかったよ…」

姫路に笑顔で迫られて、ついに明久は諦めた。

そして、いつか殺すと言わんばかりの表情をこっちに向けること
も忘れない。

「ほらほら、明久遠慮するなっ！ どんどん食えよ」

「ちょ、雄二ッ！ \$ ● 殺 ？ 「♂ 死 ♀ ☆ × ○ ▲ ! ! ! ! !」

痺れを切らした雄二が明久の口の中に無理やり弁当の中身をつ込み始めた。いい笑顔だ。アレは絶対楽しんでやがる。

「ホホホオオオホホおおほほおおおおおおッ!!」

明久が壊れた。俺達は取り合えず哀れみの目を向ける。

「おい、明久。美味しいからってそんなにはしゃぐなよ…って、美味すぎて気を失ったのか？ 全く姫路に礼も言わないなんて失礼なやつだ」

「そんな…残さず食べてくれたのでそれだけでも嬉しいですっ」

それは、ここにいる誰もがそう思っているだろう。明久に感謝はしないがね。

「あっ、そうでした。実はですねーデザートもあるんですっ!!」

「そ、それも僕が食べるからッ！ 絶対僕が食べるからね!!」

「吉井君ってくいしんぼうさんなんですっね!!」

「そうさ！ 僕は K U I S H I B O U S A N なんだ！

H A H A H A ! !」

ふう…回避完了だ。

(…お主存外鬼畜じゃな)

(だまれ。秀吉、お前が食うか?)

(…すまん)

「あれ？ 全部たべちゃったの？」

「ああ、明久が全部な」
「…ふうん」

戻ってきた美波は顔をしかめた。

「ごめんなさい、美波ちゃん」
「え、いいのいいの！ 悪いのは瑞希じゃなくて全部食べた吉井だし！ でも、おなかすいた…」
「じゃあ、俺らの弁当分けるか？ いいだろ、土筆？」
「はい、泰陀くんがそう言うのなら」

「……………美味い」

「ホント！ 美味しい（負けたわ…）」
「わるいな、少ないのに貰っちゃって」
「別にいいさ。空腹で倒れられても面倒くせえしな」
「なんでそこで泰陀が偉そうにするのじゃ？ 作ったのは芳司じゃというのに」

「俺の弁当だからだ」
「すごい美味しいですっ！ 一緒にお料理するのすごく楽しみですっ！」

「え、それ何？」
「今度、瑞希ちゃんと一緒にお料理しましょうって約束したんです」
「えー？ う、ウチも混ぜてもいい？」
「はい、喜んで！」

皆、思い思いに弁当をつつく。そして俺は土筆に食わせてもらっている。

「あの…お二人はお付き合いしているんですか？」
「いえ、そういう関係ではないですよ」

ふいに姫路が言ってきた。聞きたくてうずうずしていたようだ。
心なしに顔も赤い。こういう話題を照れくさく感じるようだ。

「へー、意外。ウチはてつきり付き合ってるかと思ってたわ」

「俺もそうだと思ってたんだが」

「……………（コクリ）」

「仲良く食べていますし…」

「実際はどうなんじゃ？」

視線が集まる。

「まあ、今は幼馴染だな、普通の」

「今はってことは今後はありえるんですか？」

目をキラキラさせて身を乗り出すなよ姫路。

「…いえ。ずっと一緒にいたいですが、付き合うことはしないと思います」

「も、ももしかして、けけ結婚!？」

「え、えー! そうなんですか!？」

女は何でこの手の話題が好きなのか…面倒くせえ生き物だな。

「…いえ…結婚なんて…出来ません」

土筆は泣いてはないが、その声は泣いているように聞こえた。

まあ、今の土筆ならそう答えるのが妥当だな。それにしても皆、俺を睨むなよ。何もしてないのに俺が悪役みたいじゃねえか。本当に面倒くせえ…。

第6問 Bクラスはタルイ

問 以下の英文を訳しなさい。

This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly.

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

樽井泰陀の答え

「これは祖母の本棚です。」

教師のコメント

面倒だからと所々省略しないで下さい。

芳司土筆の答え

「泰陀くんの本棚にいろいろな本があります。主に漫画です。」

教師のコメント

芳司さんはテスト中に樽井君のことばかり考えているのですか？

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「● 「♪」 ×

」

教師のコメント

できれば地球の言語で。

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝つのは厳しい」

雄二が言った。

弱気な発言だがそれも当然だ。Aクラスは格が違う。俺なら得意科目の数学では10人ほどなら相手を出来るが、それだけだ。他の科目にされたら腕輪の能力は使えないし、同時には1人、2人を相手をするのがやっとなるだろう。どちらにしても面倒くさい。

そして、代表の霧島翔子は姫路でも勝つのは難しい。Aクラスには姫路クラスの人材ならAクラスに2、3人は居るだろうし、うち俺と姫路以外には家庭科がAクラス並の土筆、保健体育はAクラス並の康太ぐらい。その他多くは陽動にもならず塵と化す。

「それじゃ最終目的はBクラスに変更って事？」

「いいやそんなことはない。Aクラスをやる」

「さっきといってることが違うぞ、雄二」

「クラス単位では勝つ見込みはほとんどない。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「そううまくいくじやろうか？」

「大丈夫だ。それに関しては考えがある…心配するな」

雄二がそういうなら何かあるんだろう。

「…う、うん…あれ？ 僕はなんで寝てたんだっけ？」

「お、起きたか明久。お前はBクラスの宣戦布告役になったからな」

「え？ わかった…じゃないよ！？ 雄二がいけばいいじゃないか！」

「チッ！ 騙されなかったか…ならジャンケンだ。負けた方が行くが、ただのジャンケンじゃつまらないから心理戦ありでいこう」

「わかった！ それなら僕はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は、お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

「明久、お前が雄二に心理戦で勝てるわけないだろ…」

俺は明久が無様に負ける様をただ見ていた。

「雄二、お前らは何で試召戦争なんて面倒なこと始めたんだ？」

自称365度どこから見ても美少年の明久が秀吉に実質5度だと指摘され泣きながらBクラスに宣戦布告に行った後、解散となったが、雄二を引き止めて真意を問う。姫路に言われてから気になっていたことだ。

「明久が姫路のために設備を向上させたいらしくてな。俺も試召戦争には興味があったし、それにのたつてワケだ」

「それならBクラスまでで止めとくべきだろ。Aクラスに勝てる見込みは僅かだ、下手したらAクラスに負けて全部おじゃん。それどころか設備は更に悪くなる」

良い設備を求めて結局現状より悪くなる。馬鹿がやることだな。

「うん…どうもAクラスを倒すことが目的に見えるんだよな」

「実は俺の目的は世の中は学力が全てじゃないってことを証明してみたくてな」

「うえ…そんな当たり前のことを証明するのか？ 面倒だろ…社交性、向上心、熱意、誠意…ぱっと上げただけでごろごろでるぞ、そんなもん」

「基本、お前に欠けてるものだな？ 泰陀」

「うつせえよ…」

「なあ、泰陀…お前、芳司となんかあるのか？」

「…なんだよ、いきなり」

「なんとなく他人事に思えなくなてな…」

「なに？」

「いや、すまん。忘れてくれ」

雄二は微妙な顔をして去って行く。その顔が意味するものは俺に

はわからなかった。

バカと怠惰と召喚獣

第6問「Bクラスはタルイ」

「よし言ってこい！！ 目指すはシステムデスクだ」
『『『『『サー、イエツサー』』』』』

翌日、Bクラス戦が開戦する。

やる気メーターがだだ下がった俺は結局、雄二の護衛を建前にサボることにした。前線と比べたら楽で楽々だ。俺の仕事は既に終わっているようなものだから別にいいだろう。

土筆も同じように雄二の護衛、姫路が前線部隊指揮官だ。姫路信者がクラス内に増殖してるらしいので大丈夫だろうが、咄嗟の判断や信者たちの暴走が雄二の気がかりとなるだろう。後は姫路の様子が少ないところか？

そしてもう1つ、Bクラス代表の根本恭二。ネモトキョウジカンニング、薬を盛る、喧嘩に刃物は当たり前、目的のためには手段を選ばない悪い噂が絶えず評判の悪いやつだ。侮っていたら、痛い目を見る可能性もある。

「ムツツリー二、流言を頼む。その後、情報の操作と収集だ。あと大島には話をつけておいてくれ」
「……………了解」

康太が隠密行動を開始する。大島は保体の教師で並外れた行動力という特徴を持つ。先生によって特徴は変わるのだが、身体能力の高く、保体が絶対的に強い康太と行動力のある保体教師の相性はこれ以上ないほど良い。

「はあ……だる……雄二、寝てていいか？」

「お前は仮にも護衛部隊隊長だろ。ただでさえ火力のある戦力を後ろに下げてるのにこれ以上サボろうとするな！」

「うえ……最低限はやってだろ……あ、土筆、お前に護衛部隊隊長代理を任命する。頑張れよ？」

「はい！ 泰陀くんのお役に立てるように頑張ります！」

「じゃ、俺の仕事は終了でいい……」

「いいわけあるか！」

「つてえ、殴んなよ……」

「……ごめんなさい。ガードが間に合いませんでした」

「まあ……大丈夫だ。気にすんな」

「大体、お前は芳司にいろいろと任せすぎだぞ！？ 1年のときは夏休みの課題も任せただろッ……！」

「ああ、アレね。写さしてもらっただけだ。字が違うと再提出くらうからな……筆跡模倣でも覚えるか……」

「いや、お前が芳司の筆跡を真似しても、お前自身がやった課題も全部芳司がやったと思われるだけだぞ」

「それもそうか……」

「じゃあ、私が覚えればいいんでしょうか？」

「おい、芳司。そもそも筆跡の模倣なんて簡単に出来ないからな！？」

「だったら、泰陀くんだけでも覚えて見せます！」

「泰陀の筆跡覚えて何するんだよ!？」

「え？ 将来何かの役に立つかも知れませんか？」

「止めとけ、土筆。俺のだけじゃ大して役に立たんから…その代わりに料理のレパートリー増やしてくれりゃ良いからな」

「…はい。中華でいいですね？」

「うい、あと和食…いや、和菓子？」

「はい！ 頑張りますね！」

「…お前らな」

「ん？ 何だ雄二、サボってないでちゃんと指揮取れよ」

「な、お前にだけは言われたくはないぞ！」

さて、俺の仕込みは上手くいつてくれるかね？ 骨折り損はやめてくれ、やる気がマイナスになる。

「いけえええ!! 木下を死守するんだ!!」

「うわ、何だコイツら目がヤバイぞ!？」

「僕たちの秀吉に手を出そうとした報いだ!!」

「ワシはお主らのものじゃないぞい?」

「え、もしかして秀吉、根本君のことが…」

「そんなわけないじろっ!」

「アイツら仲間割れしているぞ」

「まあ、今の内にいい潰せ!」

「ぐはッ!」

『こ、近藤くーーーーーん!』

『戦死者は補習だ! 趣味は勉強で尊敬する人は二宮金次郎といった理想的な生徒に仕上げてやろう』

『てッ鉄人!? 頼む!見逃してグアアアア!』

『よし、次は木下と吉井を狙え! アイツらは隊長格のはずだ!』

『お前ら! 僕の秀吉キユンに触るんじゃねえ! 下がってろ!』

『な、根本?』

『根本君!? よくも僕らの花の秀吉を』

『あ、明久キユン! ち、違うんだッ! 僕は明久キユンの方が好きだ!』

『な、なんだってー!!』

『おい、根本の聲がこっちからしたぞ!!』

『吉井の方が好きだと!? 吉井はやろう、だが木下は諦めてもらう』

『そんな! 須川君、君は悪魔だッ!!』

『おい、お前ら! アレを僕が言っているわけないだろうがッ!!』

『うわ、マジで根本が居たよ…噂ってマジなのか、やる気なくすわ

……』

『お前ら……とつとゴミどもを潰せ!』

『根本が前線まで出てるぞ! 困め!』

『おい、そのの! 俺を守るように展開しろ! 坂本のヤツ、絶対に潰してくれる!』

しばらくして戦況はこっちに傾き始めた。上手くいつているようだ。

それにしても前線がカオスだな。

「ゆ、雄二…何故か両軍とも雰囲気がおかしいのじゃが…それにじ

やな…」

「よし、流言が利いたな」

「流言じゃと？」

「ああ、この戦争はBクラスの根本恭二がFクラスの木下秀吉を手籠めにしようとしている。その魔の手から秀吉を守るためにFクラスが上位クラスに立ち上がった、ということにした。根本のヤツは前から気に入らなかったんだ。この際、いろいろとやってやる」

「やはり、あの気持ち悪いものはお主らの仕業じゃったか…ワシのことを根本が自分の物じゃと叫んでおると聞いて怖気がしたぞい…あれは泰陀じゃな？」

「うい、そうだ。俺が録音したのを康太が流しているな」

「泰陀くん、そんなことしてたんですか？」

「やはり…しかし、お陰でこちらの士気が異常なまでに上がり、向こうの士気は下がっておるぞい…設備のことがあるから渋々戦っているようじゃな」

下がってきた秀吉が前線の状況を説明する。こちらからは怒鳴り声は聞こえてくるが、詳しい様子がわかるわけではない。

それにしても身を震わせながら語る姿はそれほど気持ち悪かったということかね。

「そうか、上手くいくかはわからんが、Fクラスは設備を変えるつもりはないらしいという噂を流してみるか…」

「根本に潰される可能性が高いな。面倒だからやめとけ」

「噂だけではあまり変わらないのではないでしょうか？」

「いや、相手に少しでも緩みができればそれでいい程度の策だ。自分のクラスの代表はアホなこと考えてるし、負けても設備が悪くなるわけではないかもしれない。充分やる気がなくなるらないか？」

「うむ…そうじゃな」

「それは、そんな代表のためになる戦いはしたくはないですけど…」

「俺はそんなことしなくても最初からやる気はないぞ?」

「それは泰陀だからだ」

一刀で両断される。確かにその通りだがそのドヤ顔は気に入らないぞ。

「あ、あの…しょ、少々よろしいですか?」

「ん、玉内先生。何か?」

音無がFクラスに來たのはしばらくしてからだった。
タマナイ

玉内先生。ボサついた煤色の髪に丸眼鏡、顔色が悪く猫背な教員2年目の新人の数学教師、男だ。学力的には充分あるのだがその性格上、押しに弱く生徒にも下手に出てしまうというのが学園全体の評。去年は教頭や密かに憧れているのでは、と噂される現在2年学年主任の高橋先生の前でヘコヘコしていたり、不良に足蹴りされていたり、授業中に生徒に間違いを指摘されパニックに陥ったといったことが見られた。

試召戦争においては採点、召喚範囲などの基本性能は高いが、脅しに弱い。ある種の扱いやすさがあるという。

「び、Bクラスの…ねね、根本君に、た、頼まれまし、てね…じ、実は、協定を、結びたいと…」

「協定だと?」

雄二は不審そうに問う。根本、玉内、協定…嫌な想像しか浮かばない。最悪、待ち伏せて雄二を袋にするとも考えられる。

「うえ、どう考えても罠だ。面倒だから捨て置け」

一応、言っておく。断じて護衛について行くのが面倒だからではない。

「い、いえいえッ！　ね、根本君は今日中に、終わらないかも…しれない、と言っていましたから…それに、かか関してでは？」

「…確かに今日中には決着はつかないかもな」

「どうしてだ？　土気は高いはずだろ？」

「ああ、実は熱くなりすぎたヤツが補修室行きを省みずに暴走した、という連絡があった」

「うえ…マジかよ……」

「木下君、すごい影響力ですね…」

「俺も正直予想外だ。熱くなるとは思っていたがここまでとはな。消耗が激しすぎる」

ため息をつく雄二、どうやら本当に予想外だったらしい。

「で、では…空き教室で…そそ、そ、そうでした。ね、根本君がです…ひ、ひひ、卑怯なさ、ささ坂本君がし、信用で出来ないと言っていました…護衛は精鋭をつつ、連れて行くと言っていました。ただだまし討ちは、ささ、されたくはない、と」

「なんだと？」

「い、いい、言っただのはね、根本君です！　ぼ、ぼぼ僕ではありません！」

自分のことを棚に上げてそんなこと言っていたか…。

それにしても、この教師、大丈夫なのか？ 少し雄二が眉を吊り上げただけでここまでびびるかね。

「泰陀、芳司、護衛を頼む」

「パス、土筆頼む」と言いたい所だが、一応護衛部隊隊長だからな。それに根本の護衛の数次第じゃ、土筆だけじゃ潰される」

「私は泰陀くんについて行くだけです」

「よし、頼んだぞ。教室は空になるが仕方ないな」

雄二、俺、土筆で協定を結ぶために未だオドオドしている玉内について空き教室に向かった。

「何もなかったな」

「そうですね」

「だりい……」

協定は意外にも何も起こらずに終了した。

空き教室には悪どく笑っている根本とそれを守るように5人の近衛がいたのは印象的だったが、ただそれだけ、懸念されただまし討ちもなかった。玉内を脅して待ち伏せをしているとばかり思っているんだがね。

「それにしても、どうも腑に落ちない」

「協定の内容か？」

「4時までに決着がつかない場合には明日の午前9時に持ち越してその間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する、ですか…」

「正直、この協定は明日は姫路を前面に戦おうと考えていた俺の思惑に敵いすぎている」

「そして、Bクラスには大したメリットがない、か…」

「でも、停戦中に誤解の弁明が出来るんじゃないですか？ あの誤解を解くことは試召戦争に直接関係あるかわかりませんですし」

「それが1番可能性があるか…」

「…うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯…だね」

「どうしたんだ？ 明久、秀吉」

教室に着いたと思ったら明久と秀吉が扉の前で立ち尽くしていた。雄二が声をかけるが表情は思わしくない。

促されて、教室の中を見ると穴や傷だらけにされた卓袱台、そしてボロボロに壊された筆記用具があった。

そうきたか…。

Fクラスは消耗が激しい。

今、回復試験が出来ないと明日の9時までは試召戦争のための回復試験は協定違反となり責められる。

そして、回復出来なければ、自分達はしっかりと回復して万全な状態であろうBクラスの連中を相手取ることになる。

根本らしいいやらしい手だ。

「……………ッ！！」

土筆が我に返って自分の使っていた席に向かう。手に取るのは何かの破片。

「……………ごめ……………」

おいおい、根本……こりゃ、やってくれたな……お前にゃ、明日はねえよ……………。

第7問 根本恭二はタルイ

問 以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、?
 〃?の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$
 ? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$
 n B

姫路瑞希の答え

(1) $X = \pi / 6$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を「 $^\circ$ 」ではなく「 π 」で書いてありますし、完璧です。

樽井泰陀の答え

(1) $X = \pi / 6$

(2) ?

教師のコメント

どうしたんですか? 真面目に答えることもあるんですね。

土屋康太の答え

(1) X〃およそ3

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

「……う、め………」

土筆の手の中にあるのは白と黒のシャーペンの破片。昔、俺がな
くしたパンダのシャーペンだ。

なぜ、土筆が持っていたのかはこの際どうでもいい。

「……ごめん……なさい、ご……めん……なさい、ごめ……んな……さい……め

「おいッ！ 玉内、出て来い！ ぶっ殺すぞ！！」
「な、なんでしょうか！」

玉内が飛んでくる。脅せば出てくるのはかなり便利だ。

「根本潰すからちよい来いや」

「え、ええ？ ちょ。ちよっと、まま、待ってください、い、痛い、痛いです！」

玉内の言葉は無視し、後襟を？み引きずっていく。
これで準備は整った。首洗っとけや、根本。

バカと怠惰と召喚獣

第7問「根本恭二はタルイ」

「止まれ！ それ以上近寄ると召喚獣に止めを刺してこの女を補習室送りにするぞ！」

現れたのは2人の男。島田を人質に取っている。
フィールドは英語W、点数は33点と18点。随分消耗している

ようだ。

これ以上攻め込まれないための時間稼ぎの策だろう。4時という期限があるんだから有効だ。

「だが、上が上なら下も下かね」

人質、ね。詰まらん策だ。

この点数なら数学を使うまでもないだろう。

「サモン試獣召喚」

「おい、この女に止めを刺すぞ！」

「刺せばいい、俺は気が立ってるんだ」

思考を分割する。

現れるのは2つの黒い影。頭も覆う黒いローブに顔も黒い布で隠されている、全身黒尽くめの召喚獣。土筆は占い師みたいといった

が、なかなか的を射てると思う。

「な、2体だと!？」

「馬鹿な!？ 召喚獣は1人1体のはず!？」

『 Fクラス 樽井 泰陀 VS Bクラス 鈴木 二郎

& 吉田 卓夫

英語W

237点

VS

0点 &

0点

』

相手の同様の隙をつき、1つの影が2体の召喚獣を手に持つ2つの黒刀で切り捨てる。

「残念。俺の召喚獣の武器は傀儡人形、2体持つてるわけじゃねえよ」

そう、俺の召喚獣の武器は傀儡人形。召喚獣は後方で待機して、人形を操る。そして人形が刃物やからくりのギミックで敵を倒す。その

際に人形の動きも俺がイメージで動かさなくてはいけない。なかなか珍しい武器だ。普通、武器は剣や槍、弓が多い。

「いやあああーーーーーッ!!」

「たすけてくれエーーーーーッ!!」

Bクラスの2人は補習行きとなった。

「ちょっと！ 迷わず攻撃して、ウチが補習室行きになったらどうするのよ！」

「わりい、今はマジだ」

島田の攻撃をかわす。

「え？」

「すまんが、教室で土筆の様子を見ててくれ」

「え、いいけど...？ どうしたの？」

「頼む」

「え、え？ 全く何だっというのよ!？」

あまり時間はないので玉内を引きずり移動を始める。島田は混乱しているようだったが、頼みは聞いてくれるだろう。

「待つて！」

「ここを通すわけにはいかない！」

Bクラスの連中を狩りながら、進んでいると女の2人組みに遭遇した。もう少しでBクラスなのに面倒くさい。

とつとと終わらして根本を殺らなきゃ、時間切れになるだろ。

「玉内、数学だ！ 試獣召喚^{サモン}」

温存してしていた数学をここで使う。いままでは向こうから仕掛けてきたから選択権はなかった。消耗も大きい。

本当は根本に遭遇してからと考えていたが、背に腹は変えなれない。

「こちらも行くぞ！」

「「試獣召喚^{サモン}!!」」

『 Fクラス 樽井 泰陀 VS Bクラス 戸張 飛鳥 &
小関 羽月

数学 593点 VS 18
3点 & 207点 』

現れるのは黒尽くめの俺の召喚獣と中華風の衣装に身を包んだ槍と薙刀の召喚獣だ。

俺は傀儡人形を動かすために思考の分割、展開を始める。

「え、Fクラスなのに…」

「誤作動じゃないのか!？」

「残念。数学は公式覚えるだけでいいから楽なんだよ。計算結果は一瞬だ」

思考の展開力には自信がある。式を見て、公式にあてはめれば直ぐに答えはわかる。しかし、途中式を書かなければ減点や証明問題みた

いに面倒くさいことには変わりはないがね。

人形が両手に黒い刀を持って薙刀の召喚獣と槍の召喚獣に襲い掛かる。次々と斬撃を放つが相手のコンビネーションがよくかわされてし

まう。面倒くさい、激しく面倒くさい。

「腕輪、使つか」

「腕輪だと!？」

俺の召喚獣にはさつきはなかった腕輪が嵌められている。腕輪は高得点取得者の特典だ。各教科400点以上取ると装備され、召喚獣が

特殊能力を使うことが出来る。

腕輪が光り、能力が使用された。

「う、うごかないよ…」

「これは金縛りか？」

「金縛りじゃないけどね」

腕輪の能力により、相手の召喚獣は動きを止める。金縛り、といわれたがそんなちゃんものじゃない。本来の能力で倒すのは根本だと

決めている。あれは根本には丁度いいだろう。

「きゃっ！」

「うっ！」

動きを止めた相手の首を切り落とす。

『 Fクラス	樽井 泰陀	V S	Bクラス	戸張 飛鳥	&
小関 羽月					
数学	493点	V S			
0点 &	0点	『			

俺の腕輪の能力は1体に50点分消費する。しかし、それ以上に強力なのは確かだ。

「じゃ、通らせてもらうからな」

倒した2人は鉄人に補習室に連れて行かれた。全く鉄人もご苦労なことだ。

「根本！ カチコミだぞ！」

「な、何だ！？ どうやってここまで来た！？」

「どうやってて、お前を殺るために地道に他を潰してきたんじゃないかねえか」

教室に突入して、根本を発見する。教室の奥でふんぞり返っていたばつつん野郎はFクラスが来たことにくろたえていた。

「さて、玉内出番だぞ！ Fクラス樽井泰陀がBクラス根本恭二をぶつ潰す！ 試獣^{サモン}召喚！」

「馬鹿が、この人数でFクラスごときが勝てると思っているのか！ お前ら！ アイツを潰せッ」

根本の言葉に近衛部隊が現れ召喚を始めた。
俺の召喚獣とBクラス近衛部隊に根本の召喚獣が現れる。

「 Fクラス 樽井 泰陀 数学 493点

VS

Bクラス	根本 恭二	数学	211点
Bクラス	芳野 孝之	数学	161点
Bクラス	工藤 信二	数学	159点
Bクラス	真田 由香	数学	172点
Bクラス	山本 佳枝	数学	167点
Bクラス	伊藤 佑太	数学	156点

「Fクラスの癖に400点越えか、だがこの人数は倒せないだろうなあ？」

根本の嘲るような声もこの後のことを考えるとどうでもいい。

「どうだろうな…これを見てもそう言えるか？」

腕輪の能力を使用する。

「 Fクラス 樽井 泰陀 数学 243点

V
S

Bクラス	根本 恭二	数学	211点
Bクラス	芳野 孝之	数学	161点
Bクラス	工藤 信二	数学	159点
Bクラス	真田 由香	数学	172点
Bクラス	山本 佳枝	数学	167点
Bクラス	伊藤 佑太	数学	156点

□

近衛部隊の召喚獣に使用する。全部で5体、その分の思考を分割、展開する。

「何だよ何も起きないじゃないか！ Fクラスのカスは腕輪もカスだったみたいだな！！ おまえら袋にするぞ！」

準備は完了だ。

「う、動かない」

「本当…動かないよ」

「腕輪は動きを封じるものだったのか！」

勝手に誤解してるようだが…

「うわっ！ 何しやがる！」

「ち、違っぞ！ 俺は何もしていない」

根本の召喚獣に味方の召喚獣が襲い掛かり、右腕が切り落とされ

る。

「俺の腕輪の能力は金縛りなんかじゃねえよ。それはただの一端、本来は操作だ。同じフィールド内に居る召喚獣のコントロールを奪う能

力、つまりお前らの召喚獣は俺が操作している」

「そ、そんなの販促だぞ!？」

「そもそも、召喚獣1体でも操作が難しいのにこの数を操れるわけがない!」

「出来るんだからしょうがないだろ。ちよいと思考を分割して展開すりゃ出来んだよ」

「くそ!? 樽井イ!!」

そして、また根本の召喚獣に味方の召喚獣が襲い掛かり、左腕を切り捨てる。

「お前は俺の癪に障る策を使つたんだよ」

次は右足、そして左足。

「クズなお前には味方に殺されるのがお似合いだ」

そして、腹部に一突き。

「そろそろ時間も無いからな…終わりだ」

「くっそおおおお!!」

最後に首を切り落とす。

『 Bクラス 根本 恭二 数学 0点 』

根本の召喚獣が消滅する。

「おい、玉内。根本を潰したぞ、これでFクラスの勝ちでいいな？」
「は、っははい！ っただ代表が、せ、戦死した場合は、勝敗
がつが、決するるので…え、えええFクラスの勝利です！」

力なく座り込むBクラスの連中。だが、終わりじゃないんだよな。

「な、何を ぐあッ…！」

根本を殴り飛ばす。

「ななな、何ししてるんですか…！」

「戦争中は召喚者同士の殴り合いは禁止だ。だが、もう終わったんだろ？ いいじゃねえか」

珍しく玉内が声を上げるが、知ったことではない。

「おい、根本…お前が設備と筆記用具の破壊指示を出しやがったな？」

「ぼ、僕は…！」

「嘘はいらないな」

「ひいひい、僕が、僕が指示した！」

転がった根本を踏みつけながら脅しをかける。

「こ、これは返す！ だから許してくれ」

「何だ、この封筒は？」

根本が懷から取り出したのは封筒だった。しかし、こんなもの返されてもいない。

これで許して貰おうってことはこれはFクラスから奪ったものか、吉井君へとまるっこい字で書かれた封筒だ。字とその様相から姫路が明久に当てたラブレターではないかと察した。

「これはなかなか外道だな」

これで脅せば姫路は動けなかっただろう、明日使われたら面倒なことになったと考えられる。

「しかし、そうじゃない。あれの実行犯は誰だ？ それを話せば許してやるっ」

「あ、あいつ等だ！」

取り敢えず封筒は回収し、実行犯を問う。根本が指差したのはBクラス敗北の知らせを聞き戻ってきたであろうBクラスの団体さんだ。

「そうかよ！」

「な、何だよ！ うぐッ」

「ね、根元め！ 責任は取るって ガッ」

「このやる　ブハッ」

実行犯を殴り落とす。さあ、後は…

「後はお前だけだ、根本」

「な、許すつて言っただろ！」

「そんなわけないな。お前のせいで面倒なことになったんだよ」
「ぐはッ」

再び根本を殴り飛ばす。さて、このアホどうしてくれるか…。

「泰陀！」

「おい、泰陀。その位にしておけ！」

「……………やりすぎ」

「そうじゃな」

いつの間に明久や雄二が来ていたようだ。

「わざわざ、そんなことしなくとも俺が制裁を加える。こんなクズを苛めるのも面倒だろ？」

「泰陀は芳司さんの所へ行きなよ」

「…そうだな」

雄二が俺がやるから手を引けと言われたらな…このクラスも利用するらしい。

「雄二、徹底的にやれよ？」

「分かってるさ。それにしてもお前のせいでいろいろ狂ったぞ」
「いいだろ、別に。Bクラス潰したんだからな」

根本とBクラスの処遇を任せて、Fクラスに戻る。
俺が殴るよりも雄二たちなら精神的にも殺れることをするだろう。

「ありがとうな」

「いえ、大丈夫ですよ」

「いいわよ、それよりどうしたの？」

「いろいろあつたんだよ」

Fクラスに戻ると姫路と島田が土筆の様子を見ていた。まだ、土筆は寝ているようだ。

そして、Bクラスに勝ったことと礼を伝える。

「それにしても、やる時はやるのよね。普段はああだけど」

「ずっとあのままのわけないだろ」

「土筆ちゃん、想われていていいですね」

「そんなじゃねえよ」

「照れなくてもいいのに」

なんで女はこういう話に持っていくたがるのか…面倒くさい生き物だな。

「そうだ。これ姫路のか？ 根本が持ってたんだがね」

「…ッ!? あ、ありがとうございますっ! 無くしたと思って不安だったんです!」

姫路は感極まって俺の手を？んだ。目に涙を浮かべているあたりマジに不安だったんだろう。

どんぴしゃか、やっぱり卑怯だよな根本は。

「そろそろ放してもらってもいいか？」

「す、すいません！」

「なに、手紙？」

「え、えと、これはですねっ」

「まあ、島田は気にするな…ただ、うかうかしてられないぞ？」

「え？」

島田はよく分かっていないようだ。

まあ、こればかりは本人たちに任せるしかない。姫路も島田も明久を巡ってどうするのか、面白そうであるが、面倒だろうな。明久は超

鈍感な大馬鹿だし、島田も素直になれないし、姫路が優勢かねえ…明久も気にしてるみたいだしね。

「ま、俺は帰るさ」

しかし、土筆はまだ寝ている。叩き起こしてもいいが…おぶって帰るか…。

鞆…鞆は、面倒くせえ、放置だ、放置。

「じゃなあ」

手をヒラヒラさせて俺は教室を出た。

それにしても土筆をおんぶするなんて久しぶりだな。あいかわら
ず軽い、よなあ…。

第7問 根本恭二はタルイ（後書き）

泰陀と土筆を書いてみた。

しかし、残念画力のためURLを貼るだけで…

見たいという殊勝な方がいれば、キャライメージが壊れるかもしれないことと残念画力鉛筆仕様であることを覚悟の上で下記URLに飛んで下さい。

<http://1822.mitemin.net/i32515/>

第8問 プレゼントはタルイ

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

光は波であつて、（ ）である。

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

樽井泰陀の答え
『面倒』

教師のコメント
面倒ではありません。

芳司土筆の答え
『闇』

教師のコメント
違います。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

「……………」

現在、土筆をおぶりつつ帰宅中。

うん、なんというかアレだ。背中の柔らかい双子山が気になる。俺も男だ、いくら幼馴染相手でも気にならないはずが無かった。

「はぁ…全く、手間かけさせやがって…」

眠っている土筆を背負う、そして胸、あとスカートを気をつける。ため息の上に珍しくも独り言までもらしてしまう。

「うん……泰陀くん……良い匂い」

寝てるくせに腕に力を力を込めてくる。つか、臭いってなんだよ……そんなに匂うか？

「……ごめんなさい……………大好きです……………」
「起きてるなら降りろよ」

反応は無い。どうやら寝言だったらしい。絶対起きてると思ったんだが……。
しばらく、背負いつぱなしかねえ？ 注目されるのは嫌いなんだがね……おいコラ、見せもんじゃねえぞ、その餓鬼！

バカと怠惰と召喚獣

第8問「プレゼントはタルイ」

「うん……え、ええ……………！ な、なんで背負われてるんですか！？」
「ん、起きたか……じゃ、降りれ」

起きた瞬間、土筆は気を動転させる。想定内だ、土筆を背負っている理由を落ち着かせて降ろした。

「か、カバンはどうしたんですか？」

「学校に放置」

「宿題できないじゃないですか……」

「いいだろ別に宿題運ぶよりお前を運ぶほうが大切だろうが」

「泰陀くん……」

宿題とかどうでもいいしな。

「それよか今日は寄り道すんぞ」

「え？」

「とりあえず喫茶店、どこがいい？」

「は、はい。えと……」

土筆は展開について来れないみたいだが、仕方ないか。俺から誘うことは滅多にないしな。

でも、起きてからの土筆の表情に翳がある。アレが原因だろうが、一応フオローしないと……このままにしておく方が面倒、辛気臭い顔で周りをうるつかれても気分よくないしな。

『それではごゆっくりどうぞ』

「ここ来てみたかったんです。美味しいって評判で……でも、泰陀くん洋菓子より和菓子のほうが好きですし……」

「ふーん…島田とかと来ればよかったじゃん？」

「その、泰陀くんと来たかったんです」

来たのは駅前に新しく出店した『ラ・ペデイス』という洋菓子が評判の店らしい。割と落ち着いた雰囲気のお店だ。紳士な中年の店長にツインレールでタテロールのウエイトレス。なんかタテロールのウエイトレスって違和感、俺だけか？

「何にしますか？」

「土筆が食いたいの2つでいいだろ…飲み物はアイスコーヒーで」

「はんぶんこ、ですね。どれにしましょうか…」

土筆がメニューと睨めっこをするのをテーブルに顎を寄せながら眺めている。楽しそうだ。

この店で何が美味いか知らないし、土筆の方が良いのをしってるだろう。悩むのも面倒いし。いちごスパゲティとか山で遭難的な冒險もしないだろうし、いや色物な軽食があるかは知らんがね。

「イチゴクレープとチーズケーキにします」

珍しくキリッとした顔で言う。そしてさっきの店員を呼んで注文した。

『イチゴクレープ1、チーズケーキ1、アイスティー1、アイスコーヒー1です』

『了解だよ、美春。ディア・マイ・ドーター』

『うっさい黙れ』

親子か、つか店長のイメージ崩れたわ。娘にいちいちにやけんな。

「あのウェイトレスの子が好みなんですか？」

「うえ、ないな。タテロールのツインテールなんて面倒くさそうだし」

ボーっと見てたからだと思われる土筆の突っ込み、普段は気にしないはずだが今日は違うらしい。

「なんだと！ キサマ、マイエンジェル美春を、この可憐な花を、
こともあるつか『ない』だとッ！」

「うえー…なにこの展開、面倒い」

「麗しの我が娘を『ない』！ キサマの方が『ない』だろうがッ！」

「そ、そんなことありませんよ！ 泰陀くんは『あり』です！」

「女は黙ってる！」

「ひあっ！」

「お父さん、お客様に何してるの！」

「この腐れ野郎がマイエンジェル美春を貶したから更正させているのだ！」

「止めなさい！」

「はいはい、アンタの娘はまさしくエンジェルだよ、可愛らしすぎて直視できん」

といってもその娘が父親てんぷしやうを見ている形相が凄まじくてだがね。

「キサマ、娘を口説くとはなにごとだあああああああ！」

「うおっ、殴りかかってくんない！ ああもう、面倒な奴だな！」

「ハンッ、男なんかに興味ないです。とつとと帰れ豚野郎が」

「お前も酷いな、おい。ここにはまともや奴は居ないのか！」

「直視できないくらいだなって…泰陀くん…やっぱり…」

「土筆が想像してるようなことはないからな」

「覚悟は出来てるんだろうな、小僧あああああああ！」

「美春にはお姉さまがいますから、男なんて滅びればいいんです！」
「うえーい、誰かこの状態何とかしろ」

馬鹿ばっかだ。他の客も迷惑そうにしてるぞ。俺じゃねえよ、向こうが悪いんだよ。

「あなたたちはお客様に何をしてるの!!」

「お、お母さん…」

「い、いやこれはだな…」

「お、救世主現る」

一閃、二閃。拳を振るい、2人の意識を刈り取ったって過激だな、おい。

本当にスイマセンでした？ いや貴女は救世主だ。メシア

お代はいらない？ マジか。

これはサービスです？ これはどうも。

って迷惑料考えたら当然のことばかりだな。客に絡むなよ…。

奥さんらしき人物は一通りを済ました後、死体2体を引きずって奥に向かう。

「そうそう、娘は『あり』に決まっているわ」

「さいですか」

最初から聞いていたならもっと早く助けて欲しかった。

「さて、これはどうしよう」

注文したものは食べ終わった。半分ずつ味の感想をいいながら食べていたが、評判になるだけあって良かったと言っておこう。

さて、目の前にあるのはストローが2本のジュース。そう、アレである。カップルのアレだ。

迷惑料として迷惑するものを差し出すとか半端ねえよ、やっぱりヤバイなこの家族。それとも『ない』発言がそれほどまで癪に障ったのか。

「どうしましょう」

土筆はどう見ても困っている感じではない。赤面はしているが、背後に『わくわく』という擬態語が見えている。

「こうするか」

「ああっ！」

トロピカルなジュースは全て俺の腹の中だ。残念そうな顔をしてもやらんぞ。

「ふう、それでアレはどうしたんだ？」

「アレ、ですか？」

「そそ、教室でのこと」

「アレ、は…」

土筆は話しづらそうにする。でも、これを聞くのも目的の1つだ。聞かないわけにはいかない。

「アレ、俺の？」

「…はい」

意を決したかのように言う。

「あの…昔、泰陀くん苛められいたときに」

「いや、俺苛められたことないし」

「嘘です。ボロ服屋って言われていました。私に巻き込まれてですけど…」

まあ、確かにボロ服屋ってからかわれた事はある。土筆と仲良くなる前の話だな。俺ん母親は古着屋してたし。

「泰陀くん、頭も良いし運動も出来るしカッコいいのに苛められて嬉しかったんです。こんなすごい人が私と同じなんだって」

「まあ、苛められていたことに関しては全面的に否定する。からかわれていたことは認めるがねえ。そもそも、苛められるより、苛める方が好きだしな」

「それで、つい…」

「ついパクツたのか。性格悪いな、おい」

「む、昔ですッ！ 若気の至りです！ 今は、今は…」

「わ、わかったから泣きそうな顔すんなよ」

「それから泰陀くんが助けてくれたんです。そして、バレたら嫌われるんじゃないかって怖かったんです。それでずっと隠してて…ごめんなさい。あの時は泰陀くんの物で大切にしていたのに壊されてしまったことやバレて嫌われちゃうと思ってしまっ

「泣いたと」

「はい…」

「正直こんな形じゃなく言ってほしかったな」

「はい…」

「まあ、今のお前を嫌いになるのはありえんから安心しろ」

「…はいッ！」

おうおう…嬉しそうな顔すんなあ。世話を焼いてくれて家事も見
た目も良いんだから嫌う要素が無いのは当たり前なんだがね。

「うい。じゃあ、行くか」

「え？」

「まあ…アレだ。日ごろ世話になってる幼馴染に感謝の印くらい送
っても罰は当たらないだろ」

「却下」

「ダメですか？」

「チョーカーはな…」

「…残念です」

と、いうことで土筆に何かプレゼントでもしようかと駅前商店街
を回っているのだが、欲しがったのはチョーカーだった。なんと
うか、うん。嫌じゃないんだが…まあ、複雑な心境だと察してくれ。

「おい、泰ちゃん！」

なんか口リイな声が聞こえた。気のせいかな…。

「こら、泰ちゃん無視なんて酷いよ。お母さん泣いちゃうよ？」
「ういー…さーせん」

「あ、恵美さん。ただいんです」
「うんうん。泰ちゃんもつーちゃんも仲良く寄り道かな？　いいな」

気付いたら母さんがやつてる古着屋まで来ていたらしい。その名も『たるいや』なんとも気の抜ける名前だ。

そして、この身長若干143cmのポニーテールの小学生にしか見えない幼女こそ、俺の母であり、『たるいや』店長の樽井恵美である。商店街のマスコットでメグちゃんとして近所の大人に可愛がられお菓子を貰ったりしている。当然ながら初見さんは店長だとわからず、小学生が親のお手伝いをしているようにしか見えない。そして、小学生だった俺に古着屋の経営の相談をしてくるぶツ飛んだお方だ。因みに父親は普通のサラリーマンこと樽井多助である。見た目は優男、性癖は幼女性愛^{ロリコン}だろう。

「土筆、泰陀くんお帰りなさい」

「お母さん、ただいんです」

「うーす、束枝さんお疲れーす」

「む、お母さんには劳いの言葉はないの？」

「はいはい、メグちゃん頑張ってるね」

「むー。束枝えー、泰ちゃんが反抗期だよお」

「はいはい」

次に現れたのは土筆の母で『たるいや』の店員の芳司束枝^{ホウシツカエ}さんだ。丸眼鏡に1本の三つ編みで顔は年の割りにやつれて見える。それも今までの人生談を聞いたら仕方ないかとも思う苦労人さんだ。しかし、その優しい表情には母性が溢れ、その人柄が窺える。母さんとは別の方向で人気者だ。因みに俺の母さんの母親や店長だと勘違いされる。下手したら俺、土筆、母さんの3人兄妹の母親だと言われる。

「お仕事はどうですか？」

「ジューンチョーだよ！ そうだ見てみて、すごいいいのがあるの！
束枝、持ってきて！」

「はいはい、わかりました」

「じゃーんッ！！ 正統派メイド服！ つーちゃん、これでご奉仕
メイドさんになれば泰ちゃんなんかイチコロだよ！」

「え、その… た、確かに泰陀くんはメイドさんが好きですし、も、
もしかすると…」

「待て、土筆。何故そうなった」

束枝さんが持ってきたのはロングドレスの正統派なメイド服だった。
ヴィクトリアンである。

さて、土筆は俺がメイド好きだとしたまうがそんなつもりは全く
無い。

「でも、メイドさんの本もありましたし…」

「よし黙れ、さあ黙れ」

「わあ、泰ちゃんいやらしいーい」

「あらあら、男の子ね」

「きつと、つーちゃんメイドの妄想をしてるんだよ。ごめんね、束
枝、つーちゃん、こんな息子で」

「まあ、私の娘は穢されちゃったの？ でも、満更でもなさそう」
「お、お母さんッ!？」

何だこのアウエーは… 面倒。

そもそも1冊だけだし、それも康太から貰った奴だ。それで決め
付けんな。つか、暴露すんな。

これだから、女が集まると…まあ、この2人のは慣れたがね。

「あの…泰陀くん、これが良いです!」

「うえー…マジ?」

「はい!」

土筆、なぜお前はそんなに真剣な顔をしているんだ。

何の話かわからない親組は土筆からプレゼントのことを聞いて茶化している。

「泰ちゃん、2万円!」

「は?」

新品で素人目でもデザインは良いし、生地もかなり良いものらしい…2万だと! ありえん!

しかし、感謝の印だし、これからまた探しなおすのも面倒。

「まいどー!」

「泰陀くん、そのごめんなさい。そんな高いとは思わなくて」

結局、買うことになった。諭吉2人サラバだ。

「つか、そんな顔見たくて買ったんじゃない」

「え、その、ありがとうございます!」

「うい」

まあ、大分持ち直してくれたみたいで良かった。大枚叩いた甲斐があるってもんだ。

「そうそう、泰ちゃん。康太ちゃんにまた頼んでおいてくれる」

「うー、了解」

康太にはその裁縫スキルを見込んで服を作ってもらうことがある。この店は元々はただの古着屋だったが、俺が小学生の時に相談されて古着の生地を使ったりメイクやオリジナルを売るようになった。今ではオーダーメイドや新品も作っている。康太の無駄にレベルの高い裁縫スキルを知った俺が紹介したのだ。あいつのスキルは謎だ。盗聴盗撮裁縫鼻血。まあ、ほとんどエロ方向にしかないのがアイツらしい。

ん、まさか、いや…あのメイド服も？ コスプレと考えれば十分ありえるから無いとはいえないな。

「つーちゃん、晩御飯楽しみにしてるからね！」

「二人とも気をつけて」

母さんと束枝さんに送り出される。家と店は別の場所にあるのだ。

「あの、泰陀くん。今日はありがとうございました」

土筆はメイド服の入った袋を胸に抱いてまぶしい笑顔で言った。

まあ、この顔が見れたら珍しく似合わないことした甲斐がある。少し、心配だったけど大丈夫そうだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0213x/>

バカと怠惰と召喚獣

2011年11月13日00時09分発行